

# 音象徴(sound symbolism)に関する一考察

平田佐智子（関西学院大学大学院文学研究科）

## 1. 音象徴とは

音象徴(sound symbolism)は、言語学領域においては「音声はたまたまそれを含む特定の語の固有の意味とは別の象徴的な意味、すなわち一般に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味を示唆する」(田守・スコウラップ, 1999)と定義されている。例えば、サ行やカ行の音はきつい印象であるのに対し、マ行やナ行の音は柔らかい印象である(田守・スコウラップ, 1999, p. 7)というような、音声を持っているイメージ・語感を指している。

音象徴に関する研究は、心理学においては「mal」と「mil」の比較による研究(Sapir, 1929)を代表として古くから行われている。また音象徴と密接な関係にある擬音語・擬態語(以下オノマトペとする)についても多くの研究がなされている(芋阪, 1999 など)。しかしながら、これらの研究は「語に含まれる音声」と、「語の意味」の関係に注目した物が多い。それゆえに「ある音声が、どのようにあるイメージをもたらしているのか」という音象徴のメカニズムについて論じられた研究は少ない。

音声をもたらすイメージが、身体性に因る部分があるならば、ヒトの認知システムに関する知見を援用して、音象徴のメカニズムを明らかにすることができると考えられる。

そこで本研究では音象徴に対し、身体性が関わるミクロな視点、すなわち認知心理学・脳科学的な視点に限定し、音象徴のメカニズムを説明できる可能性について論じる。

## 2. 認知心理学的視点による研究

音象徴がもたらされる要因として、「知覚時に生じるクロスモーダル作用」であるとする主張がある。これは、感覚間相互作用の一種であると

されている。例えば、高い音と明るい色及び低い音と暗い色を同時に呈示し、ある刺激に対する弁別(例：音の高低判断)を行わせたと、逆の対(高い音と暗い色・低い音と明るい色)で呈示したときよりも反応が早くなるという結果が確認されている(Martino & Marks, 1999)。音と色という異なる感覚から入力された刺激であるにもかかわらず、ある一致した要素を持っているため認知処理過程において一致による促進作用が起こり、その結果反応が早くなったと考えられる。

平田・浮田(2007)はこの先行研究に基づき、無声子音(清音)・有声子音(濁音)を含むひらがな一文字と、色の明るさとの間に一致作用が見られるかどうかを同様の手続きを用いて検証した。無声子音と白色及び有声子音と黒色の対において一致作用が見られると想定して実験を行った。一致すると想定した対のみが呈示されるブロックと、そうでないブロックを比較した結果、一致すると想定した対のみが呈示されるブロックの方が有意に反応時間が短かった。この結果は、音象徴が認知処理過程内でのクロスモーダル作用によるものであることを示唆すると言える。

## 3. 認知心理学的視点による考察

黒川(2006)は音声のイメージ(語感)は、口を開ける、舌を巻くなどの発声時に伴う発音体感によってもたらされると主張している。よって、発音に伴う構音運動及びそれに伴うイメージと、その結果産出される音声との間には関連があると考えられる。

音声発話時と音声聴取時では異なるイメージが喚起されるのだろうか。その問いに答える理論として motor theory (Liberman & Mattingly, 1985)が挙げられる。motor theory では、音声知覚を可能にしているのは音そのものが持つ性質

ではなく、発話者が意図した phonetic gesture を聞き手が受け取り、再現することである、としている。この理論では、発話知覚と発話産出との間に密接な繋がりを想定している。これら2つの主張及び理論を援用することで、音声に伴うイメージは、それが発話時であろうと聴取時であろうと発音に伴うイメージと関連があるといえる。

#### 4. 脳科学的視点による考察

音象徴に関する脳科学的な観点からの仮説も存在する。Ramachandran & Hubbard(2001) と Westbury(2005)は共感覚研究の中で、音象徴のメカニズムについて言及している。共感覚 (synaesthesia)とは、色聴 (ある音を聞いたときに、ある特定の色を知覚する) のように、ある感覚に対する刺激が別の感覚の知覚を引き起こすことを指す。共感覚は共感覚者のみが持つ特殊な感覚であるとされているが、Ramachandran & Hubbard(2001)は、共感覚者と一般成人との脳内システムは同一であるという可能性を主張している。その上で、共感覚と同じシステムによって、音象徴も起こっている、と提案している。

また、ハップの原理により脳内ニューロンは「同時に発火した物が結びつく」ことによりネットワークを形成する、とされている (Van Leeuwen, 2007, p.118)。前節で述べたように、発音に伴う構音運動と、その結果生じる音声は必然的なものであり、脳内ネットワーク内での結びつきも強いことが考えられる。その結びつきによって音声にあるイメージが伴うということが考えられる。

#### 5. まとめ

本研究では、音象徴という現象に対して、身体性が関与する3つの視点からの考察を試みた。これにより、音象徴が身体性に因る部分がある程度存在するという可能性が示唆された。

音象徴は、語の意味と音声との有契的關係を論じる上で重要な概念である。よって、本研究で示

唆された身体性という観点から、言語学にとどまらず心理学・脳科学の領域から多面的にアプローチすることにより音象徴研究はさらに発展することができるといえる。

#### References

- 平田佐智子・浮田潤(2007). 有声・無声子音がもたらすイメージに対する実験的アプローチ — speeded classification task を用いて—. 関西心理学会第119回大会論文集.
- 黒川衣保子(2006). 商標評価手法の一考察 —ことばの感性評価—. 知財管理. 56, 745-752.
- Lieberman, A. M., & Mattingly, I. G. (1985). The motor theory of speech perception revised. *Cognition*, 21, 1-36.
- Martino, G., & Marks, L. E. (1999). Perceptual and linguistic interactions in speeded classification: tests of the semantic coding hypothesis. *Perception*, 28, 903-923.
- 芋阪直行(1999). 感性の言葉を研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか. 東京：新曜社.
- Ramachandran, V. S., & Hubbard, E. M. (2001). Synaesthesia? A Window Into Perception, Thought and Language. *Journal of Consciousness Studies*, 8(12), 3-34.
- Sapir, E. (1929). A study of phonetic symbolism. *Journal of Experimental Psychology*, 12(4), 225-239.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999). オノマトペ —形態と意味—. 東京：くろしお出版.
- van Leeuwen, C. (2007). What needs to emerge to make you conscious? In Jordan, J. S., & McBride, D. M. (Eds.), *The Concepts of Consciousness integrating an emerging science* (pp. 115-136). UK: Imprint Academic.
- Westbury, C. (2005). Implicit sound symbolism in lexical access: Evidence from an interference task. *Brain and Language*, , 10-19.